所員の自著紹介

『中国人日本留学史研究の現段階』
大里浩秋，孫安石編著
御茶の水書房 2002 年 5 月 31 日（447 頁）

ほぼ 100 年前，中国からどっと留学生が日本に押しかけてきて，日本語学校や下宿屋が盛況を極め，大学もその受け入れに大わらわとなった時期があった。何やら今に通じる現象だったといえなくもないが，その頃は祖国の危機を救う妙策として留学がとらえられており，没落寸前の清朝は学費を援助する代りに監督処を設けてわき目もふらずに勉学に励むよう管理を厳しくした。それに応えてかどうか，留学生は日本各地の大学，専門学校や官庁内の講習所に通って，専門知識を身につけて祖国に帰って行った。受け入れた学校も熱心に教育した様子がうかがえる。といっても，学業を放棄して清朝打倒の革命運動に参加する学生も一部にはいた。

それ以来，日本が日中戦争をおこしそれに敗北する時期に至っても中国からの留学が続くが，その時々の留学生の動きおよび日中双方の政府や民間の彼らへの対応を，さまざまな角度から明らかにすべく書いた 9 篇の論文と 2 組の資料の目録で構成したのが，この本である。科研費を得た共同研究の成果報告として，人文学会のミレニアム記念出版助成を得て公刊されたものだが，現在この続編を書きたくて調査研究を行っているところである。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『基本語英会話 Be, Have, Go, Go!』
水野光晴著
増進会出版社　2003 年 12 月（287 頁）

英語圏の人々が日常生活で最も頻繁に使用する英語の基本語彙のうち，英文構成の上でとりわけ重要なパラミーター（前置詞や副詞などの仲介語）と，基本動詞の計 50 語を中心にした短文の日英対比例文を解説したものである。とくに本書は，日本人の英語発信に，21 世紀の国際共通語としてかねてから提唱しているグローバル・イングリッシュ 1000 語の例文の内在化が不可欠であるという筆者の信念にもとづいている。本書の構成は，迅速な英文の生成・理解を促進するアプローチとして筆者がここ十年来提唱しているバイリンガル・センテンス・アナリシスの手法にもとづいている。

合理的に英文の内在化を図る場合，毎日一定量の日英対比例文をイメージトレーニングによって反復練習することが不可欠である。また，本書はマジックナンバー（最良の記憶の定着率）をペースメーカーとして 1 日分の学習量を設定してある。本書の例文の意味を，イメージトレーニングして，英文の反復練習を 1 日も怠らなければ，英会話は間違いなく自由自在になる。つまり，本書のアプローチは，いつでも，どこでも，誰もが自己ペースでストレスを覚えることなく参加できる，環境にやさしい民主的な学習法である。

幸運にも，発売一ヵ月後の本書の週間売上高は，八重洲のブックセンターで全ジャンルベスト 7 位，アマゾン・コムの読本，解釈，会話部門でもベスト 9 位，紀伊國屋書店の会話部門でベスト 7 位に入るなど，なかなか好評である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『中国のしくみが手短にわかる講座』
田畑光永著
ナツメ社　2003 年 3 月 12 日（262 頁）

中国の歴史，現状，課題などを一般向けにわか

りやすく解説したもの，1項目を2頁の読み切りにし，図版等を多用している。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『フィリピン銀行史研究 — 植民地体制と金融』

永野喜子著

御茶の水書房　2003年12月15日（xv＋356＋xxxi頁）

本書は，筆者の1990年代におけるフィリピン銀行史研究の集大成である。筆者が本書をまとめるうえで最も腐心した点は，これまでフィリピン史研究のなかで時折取り上げられてきた，第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄の実態に関する包括的解明である。従来の研究では，第一次世界大戦直後にフィリピン国立銀行は深刻な経営難に陥ったが，その原因はもっぱら，当時同行の経営権を掌握していたフィリピン人幹部が近代的銀行経営の知識をもたず，旧来の政治・経済界の人的関係に依存しながら融資事業を展開したことにあるとされてきた。

しかし，銀行史研究を進めるなかで，著者は，第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄の全貌を明らかにするためには，従来の経済史研究の手法ではどうしても解けない問題があることに気づき始めた。そのひとつは，植民地の通貨制度を維持するうえで中央銀行がない時代にフィリピン国立銀行が果たした役割について突っ込んだ議論が必要なこと，もうひとつは，フィリピン国立銀行疑獄と通貨制度の同様との関連を明らかにするうえでは，フィリピン政府の政治・行政機構はもちろん，アメリカ本国の植民地管轄機構である米国陸軍省島嶼地域担当局 (BIA) のフィリピン通貨制度維持に対して果たしてきた役割について深い洞察を得る必要があることであった。

本書は，1998～99年の神奈川大学長期在外研究員として，アメリカとフィリピンで実施した1年間の資料調査にもとづく学術研究の成果である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

文献解題

『フィリピン歴史研究関係マイクロフィルム3点』

① History of the Philippie Insurrection against the United States, 1899-1903, and Documents relating to the War Department Project for Publishing the History. US National Archives, 9 reels.

② Philippine Liberty News March 20, 1946-Dec. 20, 1946 Manila, 2 reels.

③ Voz De Manila, March 23-Dec, 7. 1945; July 4, 1946-Dec. 14, 1948, 2 reels.

本マイクロフィルム3点は、19世紀末から20世紀前半を対象としたフィリピン史研究にとって重要な史料である。①は、19世紀から20世紀への世紀転換期においてフィリピンで世紀した独立革命に関する史料である。この独立革命は、1896年に対スペイン独立戦争として勃発したものであるが、米西戦争とのからみで、1899年からは、フィリピン・アメリカ戦争として展開された。①は、フィリピン・アメリカ戦争期におけるフィリピン革命軍の反乱に関するものである。②と③は、1942～45年の日本占領期末期と1946年7月アメリカから独立を経た時期にマニラで発行された新聞のマイクロフィルムである。こうしたマイクロフィルムを活用することによって、既存の研究では得られない知見を獲得することができるかもしれない。

（文責：永野善子）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『菊池寛を読む』

日高昭二著

岩波書店　2003年3月25日（233頁）

本書は，2001年10月に行われた岩波市民セミナーにおける講義をもとに，〈岩波セミナーブックス88〉として刊行されたものである。芥川龍之介と並んで「新思潮」の代表的な作家のひとりである菊池寛は，その戯曲と小説に示された卓抜